

『仲光』にみる主従関係

野口 実

美女儿伝説と『仲光』

能『仲光』(観世流以外では『満仲』)は、いわゆる「美女儿伝説」に取材したものである。多田満仲の子息で比叡山延暦寺で出家し、満仲に出家を勧めたといわれる源賢は、童名を美女儿といった。美女儿は満仲から多田近傍の中山寺に入れられたが、武芸を事としてさっぱり修行しない。憤った満仲は、家人の藤原仲光に美女儿の殺害を命じた。しかし、仲光はいかに主命とはいえ、主人の子である美女儿を殺すに忍びなく煩悶する。その姿を見た仲光の一子孝寿丸は、父の苦衷を察して美女儿の身代わりとなることを申し出る。孝寿丸のおかげで生きながらえた美女儿は、比叡山の恵心僧都(源信)のもとで修行をとげ、やがて源信と共に多田に現れて、満仲から勘気を解かれ、孝寿丸の菩提を弔うために童子寺を建立する。これが『多田五代記』などに見える美女儿伝説のあらすじである(熱田公・元

木泰雄『多田満仲公伝』)。

能の舞台は摂津国多田館、時代設定は平安時代、十世紀の後半の頃。藤原仲光をシテに、満仲をツレ、恵心僧都をワキにし、満仲が美女儿殺害を仲光に命じるところから、恵心僧都に伴われた美女儿との再会までをとりあげ、主従の倫理のきびしさと、親子の情愛の葛藤を見事に描いている。

この作品は、大永四年(一五二四)成立の『能本作者註文』によれば世阿弥元清の作とされているが、それは不確定である。しかし、すでに室町時代に成立していたことは間違いない。美女儿伝説は、おそらく鎌倉時代以降に成立した話で、それが能楽の曲目として採用、脚色されたのは、満仲の名が広く人口に膾炙していたからであろう。そのことは、満仲の出家説話が平安末期に成立した『今昔物語集』・『宝物集』や鎌倉時代の説話集『古事談』等に収められていることからもうかがうことができる。酷い殺生を重ねる父満仲の様子を

悲しんだ源賢が、師の源信らをともなって多田に赴き、満仲に出家を決意させるといふ、この仏教的な発心説話(法華経の譬喩因縁譚としての唱導説話)を素材にして中世後期に、登場人物に造形が加えられて幸若舞曲がつくられ、さらに能へと展開を遂げていったのであろう(岡見正雄「説教と説話」『佛教芸術』54、庵道巖「舞曲『満仲』の形成」『山梨大学教育学部紀要』5)。

満仲の実像

ここに登場する満仲も源賢も実在の人物だが、仲光や孝寿丸は架空の設定である。満仲は、のちに頼義や義家、さらに頼朝や義経を生む武門源氏の祖であり、安和の変で密告者としての役回りを担ったことで知られる。摂津国多田(兵庫県川西市)を本拠としたことで多田満仲と呼ばれた。彼の出家については藤原実資(九五七〜一〇四六)の日記『小右記』の永延元年(九八七)八月十六日条に

前撰津守満仲朝臣、多田の宅において出家すと云々。同じく出家の者十六人、尼三十余人と云々。満仲は殺生放逸の者なり。しかるに忽ち菩提心をおこし、出家するところなり。

とあり、この事実が『今昔物語集』などに描かれた発心説話成立の前提となったことが知ら

れる(元木泰雄『源満仲・頼光』)。「殺生放逸の者なり」というのは衝撃的な文言であるが、当時の武士は「弓箭を以て朝暮の翫として、人を罰し畜生を殺すを以て業とす。夏は河に行きて魚を捕り、秋は山に交わりて鹿を狩る」(『今昔物語集』巻十)とか、「人の頸を切り足手を折らざらぬ日は少なく有りける」(同巻十九)というように、殺人や狩猟を日常の如く行う存在であったのである(五味文彦『武士と文士の中世史』)。そのような「武士」である満仲が道心を起こして出家したというのだから、京の巷間でも話題になったのであろう。

本当はドライだった主従関係

能『仲光』は、現代の価値観からすると異様なストーリーである。その異様さは、主人(多田満仲)のためには自らの子の命まで奪っても忠義を尽くす武士(藤原仲光)の姿にあらわれる。主人と従者それぞれの立場と本質的な人間性に根ざす心の葛藤のようなものがこの作品の大きなテーマとなっている。このような片務的な主従関係は武士(サムライ)の属性として理解されがちであり、今日、「武士道」とか日本固有の文化的ホスピタリティとして一部で高く評価されているものであるが、こうした主従関係は、この作品の設定された時代には存在しないものであった。

源平内乱の頃まで、石橋山合戦で平家方の大将大庭景親が「恩こそ主よ」と揚言したように、武士たちは「恩」(経済的給付や政治的地位)のために「奉公」するドライな存在であった。「恩」を施さない主人のもとからはすぐに去ってしまうし、複数の権門に出仕することも稀ではなかった。

たとえば、平家打倒に蹶起した源頼朝が関東を席卷すると、これに敵対した下野国の有力武士足利俊綱の「専一」の郎等であった桐生六郎は、自らの情勢判断のもと、主人俊綱を斬ってその首級を鎌倉に持参し、頼朝に家人に加えてほしいと願ひ出ている。平治の乱の際、尾張まで落ちのびた源義朝は家人の長田忠致に殺害されるが、平家はこれを賞して、忠致に壹岐守の官途を与えている。だから、このとき、桐生も何らかの恩賞を期待したことであろう。ところが、頼朝はこれを拒絶したばかりでなく、「譜代の主人を殺すなど、以ての外のことである」と言って彼を誅殺するのである。頼朝は主人を裏切って家人に加えてほしいと願った者に対しては、すべて同じ様に対処しており、さしずめ、彼こそが日本的な片務的主従道徳の「創業者」なのであった(野口実『武家の棟梁の条件』)。

かくして鎌倉幕府の成立は、武士のイデオロギーの面においても日本史上の一大画期と

いうことができる。しかし、戦乱の時代、確実にそのような道徳観を定着させるのは困難なことであった。南北朝動乱の時代、青野原の戦いの際、今川範国配下の若い武士が、軍を動かさずに小屋に隠れた範国の態度に嫌気がさし、「かくの如きおがましき大将をば、焼ころすにしかじ」と言って、小屋に火を放ったという話も伝えられている(『難太平記』)。

近代の所産としての武士道

『仲光』に示されるような封建道徳が武家社会の倫理思想として定着していくのは近世、江戸時代になってからのことであり、さらに、広く一般民衆にまで支持されるようになるのは、わが国が軍国国家と化した近代に至ってからのことであった。そのような時代状況が、明治十二年(一八七九)、この作品が観世流において復曲したことの一つの背景をなしているように思われる。ハリウッド映画『ラスト・サムライ』に描かれたような、欧米人の囁目するいわゆる「武士道」は、近代になってから新渡戸稲造らによって構築された概念であり(佐伯真『戦場の精神史』)、それが国民皆兵(日本国民総士化)の時代の社会思潮にオーバーラップして急速に普及し、今日に至ったものなのである。

(京都女子大学宗教・文化研究所教授)